

伝統的な景観保全に及ぼす大衆性の破壊的影響

オルテガ「大衆の反逆」の景観問題への示唆 *

Destructive Effects of Vulgarinity upon Preservation of Traditional Landscape

Implication of Ortega's "The Revolt of Masses" for Problem of Landscape *

小松佳弘**・羽鳥剛史***・藤井聡****

By Yoshihiro KOMATSU**・Tsuyoshi HATORI***・Satoshi FUJII****

1. はじめに

近年、我が国の伝統的な良質な風景が破壊されているとの認識が共有されつつある^{1), 2), 3)}。実際、我が国の行政においても、良質な景観形成に向けて様々な取り組みが検討されており、その中で、平成 16 年には我が国で初めて景観法が施行され、景観を保全あるいは育成するための法制度が整いつつある。また、地方自治体においても、景観条例等が策定され、地域において良質な景観づくりを推進するための様々な方策が検討されているところである⁴⁾。

しかし、そうした取り組みや法制度の制定が進められつつある一方で、依然として、ゴミ投棄や路上駐車など、景観への配慮を欠いた行為が後を絶たないことがしばしば指摘されている⁵⁾。さらに、よりよい景観や風景を創出することを意図してデザインされた建築物や土木構造物が、地域との適切な調和を欠いた景観や風景を創出してしまふ危険性も危惧されているところである^{1), 6)}。

このように、良質な風景の保全と育成のための様々な対策が実施されているにもかかわらず、「伝統的な良質な風景の破壊」に至るといふ事態が生じているとするならば、そこには人々の景観や風景に対する意識や態度そのものに根本的な原因が存在するのではないかと危惧されるところである。なぜなら、もし一人一人において、たとえそれが潜在的なものであったとしても、伝統的な良質な風景を希求するような意識や態度が既に備わっているとすれば、良質な景観保全のための取り組みや諸制度を通じて、そうした意識や態度が活性化する可能性も皆無ではないものと考えられるからである。そして、伝統的な良質な風景なるものが、時代と地域を越えた普遍的、絶対的な価値と無縁ではありえないことは、伝統的哲学の根幹的議論から演繹される基本的前提と言っても過言ではなく¹⁾この点を踏まえれば、「伝統的な良

*キーワード：景観

**学生員、東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻

***正員、工博、東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻

****正員、工博、東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻（東京都目黒区大岡山2-12-1、

TEL03 5734 2590、FAX03 5734 2590）

質な風景の破壊」という昨今の事態が意味するのは、本質的に、人々の絶対的価値への志向性が低下していることの一つの徴候である可能性が浮かび上がることとなる。

こうした人々における絶対的価値への志向性の喪失については、古くから哲学的論考の中心課題であり続けてきたが、その中でもオルテガは、その著書「大衆の反逆」(1930)⁷⁾において、近代大衆社会にみられる価値喪失の中に、人間的生の否定や非道徳が胚胎していることを鋭く指摘したのであった。オルテガの大衆論の特徴は、大衆を政治的・社会的階級として捉えるのではなく、万人に共通する「心理的事実」として捉えようとしたところにある。オルテガによれば、大衆とは「凡庸であることを自認しつつ、何ら努力もせずに責任も負わずに自らの権利を主張するような人々」であり、このような大衆が社会の中心に座ることによって様々な社会の問題が生じ得ることがオルテガによって痛烈に批判されている。

「大衆の反逆」は、20世紀初頭の欧州を対象としたものであり、また、とりたてて景観論を展開したものではない。但し、今日の景観破壊の淵源に、人々における道徳的頹廃が存在するとするならば、それは大衆人に顕著に見られる特徴であることはまさにオルテガが暗示するところのものである。それ故、オルテガの「大衆の反逆」は、現在の景観問題を考える上でも、示唆するところが少なくないであろうことが予期されるところとなる。

本研究では、以上の認識の下、オルテガの大衆論を踏まえて、個人の大衆性が日常生活圏における土木遺産の保全を含めた風景・景観保全に及ぼす否定的影響について実証的な検討を行うこととした。この目的の下、オルテガ「大衆の反逆」を基にして、人々が大衆化することで景観が破壊され得るといふ仮説を理論的に措定する。そして、アンケート調査を通じてその仮説を実証的に検証することとする。

2. 理論仮説

ここではオルテガの論ずる大衆性と景観に対する態度・意識との間の因果関係についての仮説を措定する。以下では、オルテガの「大衆の反逆」における記述を引用しつつ、それを本研究の文脈に照らして解釈することによって、本研究の仮説を導くこととする。

オルテガの「大衆の反逆」⁷⁾において、大衆が景観や風景そのものに対して如何なる態度を示すかについては、直接的に記述されていないものの、そうした態度のあり方の一つの可能性は、オルテガが痛烈に批判する大衆における甘やかされた子供の心理 「慢心しきったお坊ちゃん (p.143)⁷⁾」と呼ばれるところのものから暗示されるように思われる。すなわち、オルテガ曰く、
 「(大衆の心理的特徴は)自分の生の欲望の、すなわち、自分自身の無制限な膨張と、自分の安楽な生存を可能にしてくれたすべてのものに対する徹底的な忘恩である。この二つの傾向はあの甘やかされた子供の心理に特徴的なものである。(p.80)⁷⁾」

このように、大衆人は自分の欲望に何ら制限を課すことなく、その欲望の赴くままであり、「自分の好き勝手に振る舞える」と信じている (p.144)⁷⁾ことから、大衆人が私利私欲を追及し、そのために景観や風景を汚すこと 例えば、街路にゴミを投棄することや路上駐車すること、看板やのぼりを掲げること に、何の躊躇いも感じないことが、オルテガの議論から推察されることである。しかも、傲慢なる大衆人は物事の道理や背後関係に無関心であり、それ故、現在の「安楽な生存」を可能にした先人の営為に対する恩恵の念を持つこともないことを、オルテガは指摘しているのである。これこそまさに「甘やかされた子供 (p.138)⁷⁾」, 「慢心しきったお坊ちゃん (p.143)⁷⁾」に見られる心理状態に他ならない。そして、オルテガによれば、このような大衆人は「過去に対するいっさいの敬意と配慮を失ってしまった (p.47)⁷⁾」のであり、それ故、自分たちの社会を培ってきた歴史や伝統を否定する、ということとなる。

さらに、オルテガによれば、大衆人は「自己の希望と好みを社会に強制している (p.20)⁷⁾」のであり、これを本稿の文脈に即して解釈すれば、大衆が自分の個人的な「希望や好み」を景観や風景に求め、景観や風景を自分の思うがままに「デザイン」できると信じ込んでいると解釈することが出来よう。しかし、大衆にとって

「客観的な規範を尊敬するということを前提としているいっさいの共存形式が嫌悪される (p.104)⁷⁾」と、オルテガが指摘しているように、そうした大衆の風景や景観に対する「希望や好み」は、個性なる価値のもと、「客観的な規範」を前提とする他者との一切の共感も周囲との一切の調和も欠いたものであることが少なからず予想されるところである。

以上のオルテガの議論に一定の妥当性があるとするなら、大衆が景観に対して示す態度について、以下のような仮説を措定することが出来ることとなる。

仮説

大衆性の高い個人は、良質な風景を軽視し、破壊する。

3. 調査の概要

(1) 調査対象

本研究では、以上の仮説を検証するための実証研究の第一歩として、大学生を対象とした調査データを用いた実証分析を行うこととした。この調査では、大学生 200名を大学構内の教室に集め、調査票を配布・回収した(その内 182 人が男性(91%), 18 人が女性(9%)であり、その平均年齢は 20.03 歳、年齢標準偏差 1.87 歳であった)。

(2) 調査項目

a) 大衆性

大衆性指標を測るための質問項目として、筆者らの先行研究⁸⁾で提案された大衆性尺度を用いる。表 4 に示すような 2 尺度 19 項目の質問を設定し、各項目について「とてもそう思う」から「まったく思わない」の 7 件法で回答を要請した。ここで、傲慢性とは、「ものの道理や背後関係はさておき、とにかく自分自身には様々な能力が携わっており、自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信する傾向」を表しており、自分自身や社会等の種々の対象に対する自らの制御能力に関する過大な評価に関わる質問項目から構成される。一方、自己閉塞性とは、「自分自身の外部環境からの閉塞性」を表しており、外部世界に対する関心および外部世界との紐帯やその中での責務に関わる質問項目から構成される。

b) 景観に対する態度・意識

国土交通省が平成 15 年に発表した「美しい国づくり政策大綱」⁹⁾では、わが国の風景・景観の現状として、以下のような肯定的側面と否定的側面を示している。まず、肯定的側面として、地域による気候・風土の多様性

表 4 大衆性尺度の質問項目

「傲慢性」尺度 (α=.679)
自分を拘束するのは自分だけだと思う
自分の意見が誤っている事などない、と思う
私は、どんな時でも勝ち続けるのではないかと、と何となく思う
自分個人の「好み」が社会に反映されるべきだと思う
どんなときも自分を信じて、
他人の言葉などに耳を貸すべきではない、と思う
「ものの道理」には、あまり興味がない
物事の背景にあることには、あまり興味がない
日本が将来なくなる可能性は、皆無ではないと思う*
世の中の問題は、技術ですべて解決できると思う
人は人、自分は自分、だと思ふ
自分のことを、自分以外のものに委ねることは一切許されないことだと思ふ
道徳や倫理などというものから自由に生きていきたいと思ふ
「自己閉塞性」尺度 (α=.674)
伝統的な事柄に対して敬意・配慮をもっている*
日々の日常生活は感謝すべき対象で満たされている*
世の中は驚きに満ちていると感じる*
我々には、伝統を受け継ぎ、改良を加え、
伝承していく義務があると思ふ*
自分自身への要求が多いほうだ*
もしも奉仕すべき対象がなくなれば、
生きている意味がなくなるのではないかと思ふ*
自分は進んで義務や困難を負う方だ*

: クロンバックの信頼性係数, *逆転項目

と地域の歴史と文化に根ざした町なみの2点を挙げている。一方、否定的側面として、経済性や効率性、機能性ばかりを重視した美しさへの配慮を欠いた景観の創出と公共的空間でのゴミ投棄など、モラルを欠いた人々の諸行為の2点を挙げている。このことを踏まえて、本研究では、景観問題として「公共空間の景観破壊」、「景観に対する私的利益の優先」、「歴史ある町並みの景観」、「地域の風土保全」の4つの論点に着目し、人々の景観に対する態度や意識の指標を測るために、以下のような5つの質問項目を作成し、それぞれ7件法で回答を要請した。

「公共空間の景観破壊」

- ・ ゴミのポイ捨てをすることがありますか

「景観に対する私的利益の優先」

- ・ 生活の利便性のためには景観を犠牲にしても、仕方がないと思いませんか

「歴史ある町並みの景観」

- ・ 古い美しい町並みを維持していくことはとても大切なことだと思いますか
- ・ あなたが、「古い美しい街並み」に住んでいる場合を想像してください。その時、あなたは、その街並みを維持するため、どれくらいのコスト（時間とお金）を負担すると思いませんか

「地域の風土保全」

- ・ それぞれの地域の風土を大切にしていかなければならないと思いませんか

4. 結果

大衆性を構成する2尺度と、景観への態度・意識に関わる質問項目間の相関分析を行った。その結果を表2に示す。まず、傲慢性尺度に着目すると、「古い美しい町並みの維持」を除く、その他の4項目と有意な相関を示した。この結果は、傲慢性が高い個人は、自己利益の確保のためには、景観を犠牲にすることを厭わず、また、伝統ある景観や地域の風土を軽視する傾向にあることを示唆している。一方、自己閉塞性尺度に着目すると「ゴミのポイ捨て」とは有意な相関が見られなかったものの、その他の4項目に対して有意な相関を示した。この結果は、自己閉塞性の高い個人は、景観や風景に興味を置か

ないことを示唆している。なお、相関係数の符号に着目すると、有意にならなかった項目も含めすべての項目について、傲慢性と自己閉塞性ともに、景観に対する肯定的態度・意識については負の相関が、否定的態度・意識に対しては正の相関が示された。

ここで、有意な相関が示されたものに着目すると、傲慢性との相関係数よりも、自己閉塞性との間の相関係数が高い水準となっていることがわかる。特に「古い美しい町並みの維持」「街並みを維持するためのコスト負担」「地域の風土」の3項目に対して、自己閉塞性は0.4から0.5程度の高い相関係数となっていることが分かる。

以上より、大衆性を構成する傲慢性と自己閉塞性のいずれかが景観に対する態度・意識に関する5つの質問項目のすべてと有意な相関を持ち、そのうち3項目に関しては、両尺度とも有意な相関を持つことが分かった。そして、傲慢性よりもむしろ、自己閉塞性の方が、景観破壊を促進する行動と強く関連している傾向が示された。これらは、本研究の仮説を支持する統計的結果である。

5. 考察

(1) 仮説の検定結果

本研究では、現代大衆社会において、伝統的な良質な景観が破壊されている、という問題意識のもと、オルテガの「大衆の反逆」⁷⁾での論考を踏まえつつ、「大衆性の高い個人は、良質な風景を破壊、軽視する」という仮説を掲げた。そして、アンケート調査を実施し、仮説検定を行ったところ、仮説を支持する結果が得られた。

さて、本研究の仮説は、オルテガの哲学的思想上の論考から演繹したものである。オルテガの思想は人間の生の哲学であり、景観や風土と密接に関わることは理論的に十分に想定されると言い得るものの、彼はとりたてて景観論を展開しているわけではない。また、オルテガは、近代的な実証心理学的手法を用いて彼の論考の妥当性を吟味しているわけでもなく、彼以後の心理学研究の中でもそうした吟味はなされてこなかった。そうした中で、本研究は景観問題を対象として、大衆の有する負の可能性について実証的検討を行い、そして、それを通じてオルテガの論考に一定の妥当性が存在しうる可能性を改めて示したものである。

表2 景観に対する態度・意識の記述統計と、大衆性と景観に対する態度・意識間の相関分析結果

	平均	標準偏差	傲慢性		自己閉塞性	
			r	p	r	p
ゴミのポイ捨てをすることがありますか	1.990	1.480	.251	<.001	.083	.120
生活の利便性のためには景観を犠牲にしても、仕方がないと思いませんか	3.495	1.641	.202	.002	.331	<.001
古い美しい町並みを維持していくことはとても大切なことだと思いますか	5.490	1.556	-.110	.060	-.428	<.001
あなたが、「古い美しい街並み」に住んでいる場合を想像してください。その時、あなたは、その街並みを維持するため、どれくらいのコスト（時間とお金）を負担すると思いませんか	4.575	1.423	-.248	<.001	-.431	<.001
それぞれの地域の風土を大切にしていかなければならないと思いませんか	5.575	1.339	-.171	.008	-.477	<.001

r:相関係数, p:有意確度; bold: 1%有意(片側)

(2) 傲慢性と自己閉塞性の相違

本研究では、傲慢性と自己閉塞性の効果の相違については理論的な仮説を措定していなかったものの、データ分析の結果から、両者が景観への態度・意識に及ぼす影響について、相違点が見いだされた。ここでは、その理由とその含意について、考察を加えることとしたい。

まず、傲慢性については、「古い美しい町並みの維持」や「地域の風土」に関わる質問項目とそれほど高い相関が示されなかった。その理由について、傲慢性の高い個人は、自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信するが故に、自己利益を損ねるような事柄に対しては、過剰に拒否反応を示すものの、上記のような自己利益の阻害感を直接的に喚起しないような事柄に対しては、それほど大きな否定的反応を示さなかった可能性が考えられる。ただし、すべての質問項目において、景観に対して否定的な傾向を示しており、このことより、傲慢性は景観を軽視し、破壊する方向にあるものと考えられる。

一方で、自己閉塞性については、「ゴミのポイ捨て」に対して有意な相関を示さなかったが、これについては、自己閉塞性の高い個人は、その自己閉塞性故、外部に対する自発的に働きかけを忌避するためである可能性が考えられる。ここで、自己閉塞性に関して相関係数の絶対値が0.4以上となった項目を見ると、いずれも自分が景観や風土の保全に何らかの働きかけを行うことについての尺度である。このような外部への働きかけを駆動するのは、個人の責任意識、義務意識であると考えられる点を踏まえると、これらの項目に高い負の相関が見られたという結果は、自己閉塞性の高い個人は何らかの責任を負わされることを極端に忌避している傾向を示唆しているものと考えられる。このように、自己閉塞性の高い個人は「ゴミのポイ捨て」のような形で直接的に景観を破壊することは無くとも、景観維持の責務から逃れることで、間接的に景観を破壊する可能性が考えられる。

以上の考察より、大衆性の一つの側面である傲慢性は、景観の保全行動に負の影響を及ぼしていると共にゴミのポイ捨てに象徴される景観破壊行動に正の影響を及ぼしているという様子が、ならびに、大衆性のもう一つの側面である自己閉塞性は、とりわけ景観の保全行動に重大な否定的影響を及ぼしているという様子が、それぞれ浮き彫りとなった。

(3) 良質な景観形成に向けて

本研究で措定した仮説が「真」であるとするなら、それは、我が国の景観や風景を考える上で、極めて深刻な問題を暗示するものと言い得るものと考えられる。その理由は、本研究で論じた「大衆」が、「人間の種別」ではなく、人間に存する「心的傾向」を表すものであるためである。すなわち、本研究が描写したのは、社会の中

の大衆と呼ばれるような一群の集団における心的傾向なのではなく、万人が多かれ少なかれ持ちうる心的傾向なのである。それ故、本研究の仮説から、景観や風景に関わるすべての人々、例えば、地域住民、商店主、デザイナー、行政官などが、その地域における景観や風景を破壊する可能性を有しているという深刻な問題が暗示されているものと考えられる。そして、本研究の結果からは、人々における大衆性こそが、景観問題を深刻化させている本質的な原因の一つであるという可能性が示唆されていると言えよう。

このように個人の大量性が本質的な課題である以上、人々の大衆化を可能な限り抑制するための努力が必要であろう。その具体的な方途について、本研究のデータからだけでは明らかではないが、例えば、一人一人との絶えざるコミュニケーションを通じてもたらされる「態度変容」¹⁰⁾によって、景観への配慮を呼びかけることによって、傲慢性と自己閉塞性を少しずつ抑制する可能性が考えられる。また、先行研究⁸⁾において、家庭内でのしつけや地域との連帯等、幼少期の生活環境が大衆性の形成に少なからず影響を及ぼしていることから、家族や地域コミュニティの再生を図ることも有効な方途の一つと考えられよう。今後は、このような取り組みに関する実証的、実務的な検討を続けていくことが必要であろう。

参考文献

- 1) 藤井聡：風景の近代化とニヒリズム 宗教性なきデザインの破壊的帰結について、景観・デザイン研究論文集、No.1, pp.67-78, 2006.
- 2) 篠原修・何が本質的問題なのか、In: 都市新基盤整備研究会 森地茂 篠原修編、都市の未来 21世紀型都市の条件、日本経済新聞社、pp.94-107, 2003.
- 3) 青山俊樹：美しい国づくり政策大綱と景観法を受けたさまざまな取り組み、土木学会誌、vol.90, No.2, pp.12, 2005.
- 4) 加瀬靖子・横内憲久・岡田智秀、景観法に基づく景観計画の策定プロセスに関する研究、景観デザイン研究・講演集、Vol.2, 2006.
- 5) 藤井 聡(共著) 風格ある風景と「行動変容」、In: 土木と景観 風景のためのデザインとマネジメント、学芸出版、pp.9-54, 2007.
- 6) 桑子敏雄：風景の中の環境哲学、東京大学出版会、2005.
- 7) ホセ・オルテガ・イ・ガセット：大衆の反逆(神吉敬三 訳)、ちくま学芸文庫、1995.
- 8) 羽鳥剛史、小松佳弘、藤井聡：大衆性尺度の構成についての研究 Ortega “大衆の反逆”に基づく大衆の心的構造分析(投稿中)、心理学研究.
- 9) 国土交通省：美しい国づくり政策大綱、2003.
- 10) 藤井聡：土木計画のための社会的行動理論 - 態度追従型計画から態度変容型計画へ -、土木学会論文集、No.688/IV-53, pp.19-35, 2001